

# 防災教育から得た知識を生かしたい！

1学期の終業式当日行われた全校防災教育は、東日本大震災時に宮城県南三陸へ災害救助に行かれた上京消防署員の方から地震発生時の対処について教えてもらいました。

京都の花折断層で地震が起きたら…

京都市上京区では、震度7の予測で、平安女学院は震度6強

京都市内の被害予測 死者 最大 5,400 人 負傷者 16 万 3,400 人

全壊家屋 11 万 7,800 棟

地震が発生したら、どこでもまず、**頭を守る。**

家族への連絡手段は **災害用伝言ダイヤル171。**(1日・15日は体験利用可能)

地震はどこでも起きています。起きたときに自分の命は自分で守れる対処方法を知識として身に付けておきましょう。

## 夏休み：津波・高潮ステーション見学



↑ 防水堤の役割を教えてくださいました。

7月24日、中学生と高校生3人が大阪市西区にある「津波・高潮ステーション」を訪れ、自然災害が起こる仕組みや防災への対応策を学びました。平安女学院のルートがある川口教会で聖餐式に参加した後、そこから徒歩5分ほどで到着しました。

淀川から分かれて中之島を進んだ下流域には、大阪湾に津波や高潮が到来したときに閉まる巨大なアーチ型の水門が3つあります。ステーションの上階は治水管理事務所になっていて、大きな水害が起きたときは大阪市内の河川が氾濫しないように日々監視と対策をしています。



↓ 過去の高潮被害を知るモニュメント

西大阪地域は都市開発による地盤沈下や、網目に広がる河川に囲まれており高潮の被害を受けやすいです。過去には、室戸台風(1934年)、ジェーン台風(1950年)、第2室戸台風(1961年)によって家屋の2階部分まで浸水する高さまで水が押し寄せる被害を記録しています。南海トラフ地震発生による津波の侵入や、地球温暖化による巨大台風の到来に備えて、より高い水門の建設が進められています。



※訪問した生徒の感想は文化祭で展示する予定です。



# ～局地的豪雨の被害をふりかえる～

2022年の夏は予想以上に局地的かつ短時間、さらに記録的な降雨量によって各地の河川が氾濫しました。7月15・16日では宮城県の大崎市、松島町、栗原市で避難勧告が出され、冠水した道路、床上浸水、橋の崩落などの被害を出しました。8月3・4日では山形県南部の6市町でも最も危険度の高い（今年全国で初めての）大雨特別警報が発表されました。この豪雨によって500棟を超える家屋が浸水、JR米坂線の鉄橋が崩落するなど、市民生活に甚大な被害を及ぼしています。

平安女学院中学校・高等学校から、東日本大震災を機にさまざまな地域に支援物資を送ってきました。西日本では岡山県の真備町（2018年）、東日本では宮城県の丸森町（2019年）へ手紙を送りました。このページでは収まらないほど、他の地域でも水害に悩まされています。毎月取り組んでいる11円募金の送り先、使い方も被災地の状況に応じて必要な地域に渡せるようにしていく予定です。



# ～福島・双葉町11年ぶり居住再開～

2011年3月の東京電力福島第一原発事故で唯一、全住民の避難が続いていた福島県双葉町は8月30日、帰還困難区域内の特別復興再生拠点区域（復興拠点）の避難指示が解除され、11年5ヶ月ぶりに居住できるようになった。これで居住人ゼロの被災自治体は解消する。（中略）居住可能エリアはJR双葉駅周辺を含む復興拠点の5.55平方キロと、2020年3月に避難解除され、東日本大震災・原子力災害伝承館や企業誘致の拠点が建設された町北東部の2.2平方キロ・町面積の15%に当たり、人口の6割を超える1449世帯3574人が住民登録しているが、期間への準備宿泊に参加したのはのべ52世帯85人のみだった。町は2030年ごろの居住人口2000人を目指している。役場は福島県いわき市から町内に戻り、9月5日から新庁舎で業務を始める。（京都新聞8月30日朝刊より転記）

↓テレビユー福島の8/30ニュースより双葉町の様子

## 復興・廃炉 難題なお山積み

被災地の復興は居住地を追われた人々だけでなく、処理水の海洋放出の問題など国際的にさまざまな議論が残っている。そんな中、政府は次世代原発（革新軽水炉を候補に）建設を検討している。事故後の政策から180度転換させる判断だが、私たちは廃炉まで長い時間がかかる現実も忘れてはならない。

